

# 二つの視点が重なるとき

## マンガと言語の構造的類似性

出原健一

### 1. 目的

本研究の目的は、マンガ学における視点概念を言語学に応用することで、言語とマンガの相同性を指摘するとともに、言語研究の新たな可能性を模索することである。具体的に言えば、英語の自由間接話法とマンガの同一化技法・身体離脱ショットとの間に構造的な並行性があることを指摘した上で、マンガ学の視点概念を認知言語学の視点理論に組み入れることで新たな言語研究の可能性を示す。

### 2. 同一化技法と身体離脱ショット

マンガのコマで描かれた「見え」が誰からのものであるかを多くの場合読者が理解できるのは、マンガの「文法」がある程度確立しているからである。例えば、ある登場人物が何かに気づいた様を描いたコマの次に、その登場人物からの「見え」が描かれたコマが続くことがよくある。この一連の流れを、竹内(2005)は「同一化技法(モニタージュ型)」と名付けているが、出原(2021)ではこの同一化技法を共同注意の観点から(1)のように定義した。

(1) マンガの語り手の誘導により読者の注意を特定の登場人物(およびその行為)に向けさせることで読者と語り手の間で(誘導的)共同注意を成立させ、さらにその直後にその登場人物の知覚(主に視界)・思考を提示することで読者と語り手および(疑似的に)登場人物との間に(追跡的)共同注意を成立させる技法。(出原 2021: 96)

また、同一化技法と関連する表現手法として、明らかに登場人物の「見え」を表現しているコマであるにもかかわらず、同一のコマにその当該の登場人物も入り込んでいるという描き方もよく見られる。自分の視界に自分自身が入り込むことは現実的にはあり得ないが、映画論では「肩ナメショット」と言われている手法としてすでに確立されている構図であり、泉(2008)は半主観でありつつ半客観であるコマとして「身体離脱ショット」と呼んでいる。同一化技法と身体離脱ショットが組み合わさり、登場人物を描いたコマ(客観ショット)→身体離脱ショットのコマ→主観ショットのコマといったコマ構成もマンガでは珍しくない。

### 3. 英語の自由間接話法

前節で見たマンガのコマ構成とかなり類似していると考えられる言語現象として、欧米語に見られる自由間接話法がある。

(2) She stared at him in speechless amazement. *How could he come back so soon? Why had he not informed her of his return?* But he was there waiting for her to throw herself into his arms. (江川 1991: 481)

語順や“here”などの語彙的直示表現は直接話法的で登場人物視点であるのに対し、時制や文法的直示表現(人称代名詞など)は間接話法的で語り手視点であると言われているが、このような2つの視点の重なりは、半主観でありつつ半客観である身体離脱ショットと類似していると言える。さらには、自由間接話法の直前には、(2)で言えば“stare”のような、その登場人物の知覚や行為が表現されることが多いことが多くの研究者によって指摘されている(O'Neill 1994 など)が、これはマンガで言えば同一化技法における最初のコマと機能が同じと見なすことができる。このことを踏まえ、出原(2021)では自由間接話法の共同注意的側面を(3)のように説明した。

(3) 語り手が、登場人物の行為・経験を表す表現を提示することで、読者との間で登場人物に対する誘導的  
共同注意を成立させ、さらにその直後にその登場人物の知覚・思考を提示することで読者と語り手及び(疑似的に)登場人物との間に追跡的共同注意を成立させる技法(小説では、知覚の場合は知覚描出、思考の場合は自由間接話法と従来呼ばれている)。(出原 2021: 182-183 を一部省略)

このようにマンガと言語には構造的な類似性が見られる。認知言語学では言語と文化的構築物との間に相関性があると考えられているので、これは当然のことと言える。

#### 4. マンガ学と言語学の学際的研究を目指して

認知言語学において「視点」は重要な概念である。例えば池上(2011 など)が提唱する「主観的把握」と「客観的把握」の区別は、人が事態把握をする際に視点をどこに置くかに依る。この概念は二分法的な区別ではなく、両者の間に連続性を認めてはいるものの、自由間接話法のような、複数の視点が顕在化している言語現象には対応が難しい。それに対し、マンガ学では身体離脱ショットの他にも多くの視点に関する用語が存在する。言語表現では視界に入っているものでもプロファイルされなければ言語化されないが、マンガでは見えているものはすべて描かれる傾向が強いため、視点に関わる様々な概念が必要になるのである。これまでマンガ学の研究成果を言語学に応用するという試みは行われていなかったが、今後、マンガ学と言語学の学際的研究を行う価値は十分あるように思われる。

その一例として、最後に日本語の自由間接話法的表現を見ておきたい。日本語には体系的な話法形式は存在しないとされているものの、語り手の視点と登場人物の視点が融合している言語現象は多々指摘されている。出原(印刷中)では、そのような先行研究を踏まえた上で、ライトノベルにおける事例を分析した

##### (4) 「あれ？」

机の中を漁り、続いて鞆の中を覗き、止めに教室後方のロッカーの中を確認してから、政近は少し焦りを覚えた。

次の授業で使う参考書が見当たらないのだ。教室の時計を確認すると、次の授業が始まるまで残り二分弱。隣のクラスにいる妹に借りに行くとしても、少し迷惑な時間だろう。(燦燦 SUN 2021: 13)

(4)では、「次の授業で」以降は政近の思考が表現されていると読むこともできるが、よく考えてみれば、政近が「見当たらないのだ」と考えるのは不自然である。この「のだ」は聞き手(読者)に向けて説明を行う用法と考えられるが、この小説は三人称語りであり登場人物が読者に話しかけることはない。とはいえ、この箇所を完全な地の文(語り手視点)と解釈することも、登場人物の心の声が多用されるという特徴を持つライトノベルにおいては不自然な読みと思われる。つまり、この「のだ」文は語り手の視点と登場人物の視点が融合した、いわば「身体離脱ショット」と言うことができるだろう。さらに言えば、「政近は少し焦りを覚えた」という表現が同一化技法での最初のコマにあたりと捉えれば、(4)全体として、マンガの「登場人物を描いたコマ(客観ショット)→身体離脱ショットのコマ→主観ショットのコマ」と同じ構成と解釈することも可能となる。もちろんさらに精緻な調査・分析が必要であるが、同様の事例はかなりあることは確認できている。

以上、言語分析にマンガ学の知見が応用できる可能性を示した。

#### 参考文献

- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説』改訂三版. 金子書房.
- 出原健一. 2021. 『マンガ学からの言語研究 視点をめぐって』. ひつじ書房.
- 出原健一. 印刷中. 「ライトノベルにおける二重の語り 「のだ」を中心に」. 『日本認知言語学会論文集』第23巻.
- 池上嘉彦. 2011. 「日本語と主観性・主体性」澤田治美 編. 『ひつじ意味論講座 主観性と主体性』 pp. 49-67. ひつじ書房.
- 泉信行. 2008. 『漫画をめぐる冒険 [上巻・視点]』 ピアノ・ファイア・パブリッシング.
- O'Neill, Patrick. 1994. *Fictions of Discourse: Reading Narrative Theory*. University of Toronto Press.
- 竹内オサム. 2005. 『マンガ表現学入門』. 筑摩書房.
- 引用ライトノベル
- 燦燦 SUN. 2021. 『時々ボソッとロシア語でデレる隣のアーリャさん』第1巻. 角川スニーカー文庫.